７．本間自準亭跡　（史跡）

（１）本間道悦

本間道悦は近江の領主戸田左門に仕えた本間資勝（すけかつ）の三男として生まれました。戸田家が大垣に移封された時期には大垣に住んでいました。寛永１４年（１６７３年）本間道悦が１５歳の時、九州・島原の乱が起こった際に出陣しましたが、左足を負傷したため、武門を捨て、医師となり戸田藩の藩医として仕えました。やがて江戸に出た本間道悦は、日本橋青物町に居を構え、医師として名声を高めるとともに俳諧にも優れ松江と号し、松尾芭蕉とも親交を深めるようになりました。

延宝１０年（１６８２年）に本間道悦は潮来天王河岸に居を構え、「自準亭」と名付けた診療所を開設し、困窮する村民に無料で診療しました。潮来に居を構えた理由の一つとして、芭蕉の禅の師ともいわれる仏頂和尚が江戸深川より鹿嶋の根本寺に移り住んだことで、本間道悦は根本寺に近い潮来を選んだと言われています。

その後「自準亭」では、潮来の商家が栄え発展するに従い「読み、書き、そろばん」を中心に礼儀作法や日常生活に必要な学習等の教育を行いました。

道悦は元禄１０年（１６９７年）７９歳の生涯を終わりましたが、２代目道因が家業を継ぎ、３代道仙も医業にあたりました。この道仙が上戸の長国寺に祖父道悦と父道因の２人の墓碑を建てました。４代道意（今の小美玉市に移住）、５代玄琢は歴代水戸藩医として活躍しました。

本間家はその後も代々名医を輩出、なかでも８代玄調は水戸藩主徳川斉昭に仕え、漢方のほか西洋医学を修め麻酔を使った外科手術や種痘等、近代医学を築き水戸三の丸に銅像となっていることは特筆すべきものです。

（２）松尾芭蕉　鹿島紀行との関係

俳聖・松尾芭蕉は、参禅の師の鹿嶋根本寺の住職仏頂和尚と、江戸で医師を開業し、後に潮来にいる本間道悦と親交がありました。芭蕉は貞享４年（１６８７年）８月、鹿島の山の月見を志し門人曽良と宗波を伴って仏頂和尚を訪ねて旅に出て、その帰路本間自準を訪ね、現在長勝寺にある三吟の句を詠んだとされています。

長勝寺にある三吟（現在の小美玉市にも三吟の句碑があります。）

ねぐらせよ　藁ほす宿の友すずめ　（本間自準）
あきをこめたる　くねの指杉　（桃青・芭蕉）
月見んと　潮ひきのぼる　舟とめて　（曽良）

この時の紀行文が『鹿島紀行』として知られ、『奥の細道』の２年前のことです。